

平家物語

全十三卷

朗読：岡崎 弥保
監修：大津 雄一

早稲田大学教育・総合科学学術院教授

覚一本

『平家物語』の世界

大津雄一

1 覚一本の成立

『平家物語』が、いつ、だれの手によって書かれたかはわかっていない。兼好法師の『徒然草』第二二六段は、後鳥羽院の御代に出家して、天台座主慈円のもとにいた「信濃前司行長」という貴族が、武士のことなどは「生仏」という琵琶法師に問い聞かせて記した、という説を載せる。「信濃前司行長」は実在せず、下野守であった藤原行長のことではないかとされているが、『徒然草』は、後鳥羽院の御代からはすでに一〇〇年以上も経った頃に書かれたもので伝承の域を出ず、確かな資料とはいえない。ただ、知識のある貴族と琵琶法師との協働に

の内容もやはりわからないが、『平家物語』がこの二〇年ほどで「成長」していることを推測させる。

この後、『平家物語』は様々な諸本を生みだしていく。現在、諸本は、読み本系と語り本系に大別される。読み本系は、読むための本文で、代表的な本文には延慶本がある。延慶本は、鎌倉時代の延慶二年から三年（一二三〇九〜一〇）にかけて、紀州根来寺で書写されたものを、応永二六年から二七年（一四一九〜二〇）にかけて再度書写した本文である。現存諸本中で最も古態を留める本文である。このほかに『源平盛衰記』、長門本、四部合戦状本などがある。読み本系の特徴は、語り本系に比べて記事量が多いことである。特に、源頼朝の挙兵に関わる記事を多く持つ。語り本系は、延慶本のような本文を整理して成ったのではないかと考えられている。

語り本系諸本は、琵琶法師の語りに基づく本文である。その代表的本文が、南北朝期の琵琶法師明石検校覚

よつてこの物語が成立したという伝えは留意すべきである。

『平家物語』の存在を伝える歴史資料は、「兵範記紙背文書」が最も古い。延応二年（一二四〇）七月頃の書状の文面に、「平家と号す」る「治承物語六卷」を書写したことが記されている。「治承」は一一七七年から一一八一年にかけての年号である。平家打倒の陰謀が露見した鹿ヶ谷事件から平清盛の死去までがこの足掛け五年の間に起こっている。「治承物語」は現存せず、その内容はわからないが、おそらく一二三〇年代後半から一二四〇年代はじめの頃に、『平家物語』と称されるものが成立したと考えられている。

次にその存在が確認できるのは、「深賢書状」である。正元元年（一二五九）正月以前の醍醐寺の僧深賢の書状で、合わせて八帖（本二帖、後二帖）の「平家物語」を借り受けたことが記されている。この八冊本も現存せず、そ

うによって制定された覚一本である。覚一は平家琵琶（平曲）の名人として知られ、盲人の組織である当道座を再興し惣検校となるなど、政治的手腕にも勝れていた。彼の流派は一方流と称され、名に「一」を持つ琵琶法師を輩出した。その覚一が、彼の死後に弟子たちの中で語りの本文についての論争が起こることを避けるために、口述筆記させて、当道の正本（証本）として制定したのが、覚一本である。応安四年（一二七二）三月一五日付けの奥書が付されており、語り本系の中では最も古い年記を持っている。

本来、門外不出であったが、書写が繰り返されて世に広まり、近世にはこれを基とした流布本が版行された。『平家物語』諸本の中では最も表現に優れているとされ、戦後の古典全集類や学校教科書などでは、この本文が採られることが一般であり、『平家物語』といえば覚一本を指すようになった。

2 語りと鎮魂

さて、語り本系の諸本は二つに大別される。灌頂巻型かんじょうのまき

と断絶平家型である。前者の代表的本文が覚一本であり、後者には、屋代本、八坂系諸本などがある。その区別の基準は、一二巻のほかに第一三巻目にあたる灌頂巻を持つか持たないかである。断絶平家型は、巻一二の最後に、平清盛のひ孫に当たる平家嫡流の六代の斬首を記し、これによって平家が断絶したことを確認して終わる本文である。これに対して灌頂巻型は、その後、清盛の娘であり安德天皇の母であつた建礼門院平徳子の、出家から往生までが語られる灌頂巻という特別の巻を持つ。「女院出家」、「大原入」、「大原御幸」、「六道之沙汰」、「女院死去」の五章段から成る。これらの章段は、断絶平家型では巻一一・一二に、年次に従い分散して収められているが、覚一本はそれらを灌頂巻に集め

て、物語の最後に置いたのである。なぜそうしたのであるうか。

建礼門院は、壇ノ浦で入水するが救け上げられて都に連れ戻され、出家する。その後、煩わしい都を離れ大原の寂光院で、安德天皇と平家一門の菩提を弔う祈りの生活を送ることになる。思わざるに後白河法皇の訪問を受けると、自らも含めた平家一門の受けた苦しみ¹を法皇に訴えて、涙させることになる。そして、その後も祈りの生活が続け、見事な往生を遂げる。その往生は、女院が願っていた安德天皇と一門の人々の魂の救済が果たされたことを示している。つまり覚一本は、平家の人々の鎮魂が成し遂げられたことを示して語り終えるのである。平家一門の血が絶えた、ということ²で物語を終えてしまつては、いかにも無残で救いがないと思つたのであろう。

この時代、怨霊思想が盛んであつた。怨みを抱いて死

んだ人間の霊が、天変地異や疫病を流行らせるなどして祟りをなすという思想である。平家の怨霊は当然大きな問題となる。壇ノ浦の合戦から四か月も経たない元暦二年(一一八五)七月九日に、都は大地震に襲われるが、それは平家の怨霊の仕業とされた。巻一二「大地震」はこれを記して、

十善帝王、都を出でさせ給ひて、御身を海底に沈め、大臣公卿大路をわたして、その頸を獄門にかけらる。昔より今に至るまで、怨霊はおそろしき事なれば、世もいかがあらんずらんとて、心ある人の歎きかなしめぬはなかりけり。

と語っている。実際に、鎮魂の儀式が執り行われたこと

が記録に残っているが、たとえば、平家作者とされる「信濃前司行長」を庇護したという比叡山延暦寺の天台

座主慈円も、大懺法師という寺院を都に建立し、平清盛の甥に当たる忠快という僧も招いて、保元の乱以降の怨霊の鎮魂を図っている。『平家物語』は、この大懺法^{だいせいぼうしん}院で書かれたのではないかとの説もある。なぜなら、死者について語り継ぐことが鎮魂につながると考えられていたからである。

そもそも、琵琶法師は盲目であるがゆえに、人間には見えない「冥」の世界と交流し、死者の霊とも交信できる霊能者と考えられており、死霊の鎮魂も生業としていた。「生仏」という琵琶法師が『平家物語』の成立に関わっていたことは、この意味でも注目されるのである。琵琶法師の語りによって、平家の鎮魂を図ろうという思いが、『平家物語』にはあるのではないかということである。

小泉八雲の『怪談』に収められている「耳なし芳一」の話は、よく知られているだろう。平家滅亡後、安德天皇

と平家の人々の菩提を弔うために、赤間が関に阿弥陀寺（現在は赤間神宮）が建立された。平家琵琶の名手として知られていた芳一は、この寺の和尚に招かれて暮らしていた。ある晩、侍のような声が、「芳一」と呼ぶ、その声に従って、近くの旅宿に滞在中という貴人のもとに赴き、所望されて壇ノ浦合戦を語ったが、安徳天皇が入水する場面になると、聴く人々は大声で泣き叫んだ、そして、明晩から六日間来て、語ってほしい、ただし誰にも告げてはならないと言われる、翌日の夜も出かけて語るが、和尚に外出を知られてしまう、その翌日の夜、和尚が下男に命じて芳一の後をつきさせると、芳一は安徳天皇の御陵の前で琵琶を弾いて語っていた、平家の怨霊に取り憑かれていると知った和尚は、彼の身を護るために全身に経文を書きつけて、やむなく法事に出掛けるが、耳に書くのを忘れてしまった、すると夜になって迎えに来た怨霊は、芳一の両耳を引きちぎっ

3 今、『平家物語』を

聴くということ

そのような鎮魂の思いを抱く物語が、「いくさ」（戦争）を肯定することはない。確かに、合戦話は多くあるが、戦いを賞賛しているわけではない。『平家物語』が好んで語るのは戦いに巻き込まれた人々の悲劇である。たとえば一ノ谷合戦では、一七歳の公達平敦盛の死が語られる。少年の死はもちろん悲惨だが、むしろ殺さざるを得なかった熊谷直実の苦しみを語ることに物語の主眼はある。殺される方も殺す方も悲劇的なのである。同じ一七歳の平知章も殺される。彼は、父の知盛をかばって敵と組み合い、討たれてしまう。そして父の知盛は我が子が身代わりになって討たれるのを見ながら、そこから逃げてしまう。知盛は、兄の宗盛に、親を助けようと戦っている子を見ながら、どうして逃げて

て持ち去ってしまった、それ以来彼は「耳なし芳一」と呼ばれるようになったが、芸はますます冴えわたり、豊かになった、という話である。

この話は、琵琶法師が霊と交流できる特別の能力を持ち、時にはそれゆえに取り憑かれてしまうことを示しているが、同時に怨霊たちが、自らの悲劇を聞きたがっていることが語られている。死者の霊を慰めるためには、死者のことを忘れることなく、その苦しみを永遠に死者と共有する必要があったのである。それは、現代の私たちにも共通する心理であろう。死者は自らの悲劇が語られることを望み、語られることによってその魂は鎮められたのである。

覚一本『平家物語』は、灌頂巻を設けることによって、より確かに安徳天皇や平家の人々を鎮魂し、救済することを図ったのであろう。

来てしまったのだらう、もし他人のことであつたならどんなにか歯がゆく思うだろうに、自分のことになつたらよくよく命は惜しいものであつた、と泣きながら述懐する。生き残ってしまった者を苦しめるのも「いくさ」である。一ノ谷合戦は、夫の平通盛を討たれた小宰相の哀れな入水の話で語り納められる。

「いくさ」は家族を破壊する。清盛の嫡孫維盛は、都に残した妻子のことを思い続け、都の妻子も維盛のことを思い続けるが、彼は熊野の沖に入水せざるをえなかった。物語の最後の章段である灌頂巻「女院死去」で、平清盛は厳しく断罪される。平家一門の夫婦や親子が、離ればなれになるといふ悲劇をもたらしたのは、清盛が帝をも畏れず、万民のことも顧みず、死罪流罪を思うままに行った報いであると語る。そのような悲劇は、平家の人々だけに限らない。清盛は、鹿ヶ谷事件に関わつた新大納言藤原成親を流罪に処し、そして惨殺するが、

物語は引き裂かれた成親の家族の悲劇を切々と語る
のである。それは、鬼界ヶ島に流された俊寛しゅんかん僧都そうずの場合
も同じである。権力の過剰な行使も暴力である。

暴力の発動は、人々に悲劇をもたらす。そんなことは
昔からわかりきったことだったのだ。それでも人間は
暴力を制御できないでいる。今に至る歴史を見れば明
らかだ。人間は暴力と共にある。まことに不幸な真実で
ある。だからこそ、私たちは暴力がもたらす悲劇を絶え
ず確認する必要があるのだ。『平家物語』を聴くとい
うことは、そのような営為でもある。



巻第一

仏教の無常観を記した有名な冒頭から始まる巻第一は、天承二年（一一三二年）の忠盛の昇殿から、安元三年（一一七七年）の大火による内裏の焼失までが描かれる。

桓武天皇の血筋である平氏は、忠盛のときに昇殿を許され、その子清盛は、保元・平治の乱の活躍で、絶大な権力を持った。平家一門はことごとく官位につき、栄華を極める。平家のふるまいは次第に目に余るようになるが、厳しい言論統制のもと、人々は口を閉ざす。清盛に翻弄された白拍子の女たちもいた。後白河院とその近臣たちは鹿の谷でひそかに平氏討伐の企てをするのだった。

04 禿髪 かぶろ

清盛は出家したが、その権勢はさらに増した。禿髪（おかっぱ）のように切りそろえた髪形に赤い衣服を着た童たちが市中に放たれ、平家を悪く言う者は徹底的に検挙された。

05 吾身栄花 わがみのえいが

平家一門は繁栄し、清盛の息子も娘もみな栄華を極めた。平家が治める国は日本六十六か国中、三十余国となり、半分以上が平氏の支配下となった。

06 祇王 ぎおう

清盛は白拍子の祇王を寵愛していたが、若い仏御前が現れるとあつさり乗りかえてしまう。失意の祇王は母と妹とともに出家する。のちに仏御前も尼となって祇王のもとに行く。四人は一心に仏道修行をし、それぞれ往生したという。

01 祇園精舎 ぎおんしょうじや

この世のあらゆるものは無常であり、栄華を極めた者もいつかは滅びる。昨今の我が国では平清盛がそのよい例である。

02 殿上閣討 てんじやうのやみうち

平忠盛は多大な寄進をして鳥羽上皇より昇殿を許される。殿上人たちはこれを妬み、闇討ちを企てるが、忠盛は機転を利かせて闇討ちを回避した。

03 鱸 なずき

忠盛の跡を継いだ清盛は保元・平治の乱で武勲をあげ、太政大臣にまで昇りつめる。かつて清盛が熊野を参詣したとき、船に鱸が飛び込んでくるという吉兆があったという。

07 二代后 にだいのきさき

父の後白河院と対立する二条天皇は、故近衛天皇の后を強引に自分の后にした。二代にわたる后は先例のないことで、后はその運命を悲しんだ。

08 額打論 がくうちろん

二条天皇は病になり譲位するが、そのまま亡くなる。葬送のとき墓所にかける寺の額の順序を破つて、延暦寺の額が先にかけられた。興福寺の僧たちは怒り、延暦寺の額をさんざんに叩き割ってしまった。

09 清水寺炎上 きよみづでらえんしやう

そののち、延暦寺の僧たちが都に乱入してきた。騒動の中で、後白河院が延暦寺に命じて平家追討をするとの噂が流れるが、延暦寺は興福寺の末寺である清水寺をすべて焼き払い、先日の報復を果たした。

10 東宮立

とうきゅうだち

建春門院を母とする後白河院の第三皇子は親王、東宮を経て、天皇の位についた(のちの高倉天皇)。建春門院の兄である平時忠の権勢はめざましく、「平関白」と呼ばれるほどであった。

11 殿下乗合

てんがのりあひ

清盛の嫡男重盛の子資盛が、参内途中の摂政藤原基房の一行と遭遇するが下馬の礼を取らなかったため、恥辱を受けて帰ってくる。重盛は資盛をいさめるが、清盛は激怒し、屈強の侍たちを集めて基房を襲い、供の者たちの髻を切るという暴挙に出た。

12 鹿谷

ししのたに

高倉天皇は元服し、清盛の娘徳子が入内した。そのころ大將の職が空き、名だたる貴族たちが後任を望んでいたが平家一族が任命される。それを恨んだ藤原成親は、鹿の谷にある俊寛の邸で後白河院や西光法師らと平氏討伐の企てをする。

15 御輿振

みこしぶり

たえかねた山門の僧たちはついに神輿を振り上げて入京する。源平の武士たちは招集され宮中の警護にあたる。少ない手勢の源頼政は渡辺唱を使者に立てて、僧たちとの衝突を避けるが、待賢門に回った僧たちは多勢の重盛軍にさんざんに攻められ、山へ退却した。

16 内裏炎上

だいりえんしやう

神輿に矢を立てられた山門の僧たちの憤りは激しく、不穏な噂も流れるなか、平時忠が使者となり山門の怒りを鎮める。ようやく師高・師経は処罰された。のちに京は大火にあり、内裏にいたるまですべて焼き尽くされる。山王の使者である猿が京に火をつけたと人々は夢に見たという。

13 俊寛沙汰鶴川軍

しゅんかんのかた

うがわいくさ

俊寛は僧でありながら、ただけしくおごれる心の持ち主であった。北面の武士からなりあがった後白河院の近臣西光法師の子師高と師経は加賀国の役人となるが悪政を行い、白山の末寺鶴川寺の僧たちと衝突する。僧たちは白山の神輿をかついで比叡山へ訴える。

14 願立

がんだて

山門の僧たちは師高と師経を罰するよう奏上するがなかなか裁断がおりない。山門の訴えは昔から軽視できぬもので、かつて後二条関白師通は山王の怒りにふれ、重い病に臥す。母の懸命の祈りによって、三年延命されたが三十八歳で亡くなったという。

卷第二

卷第二は、治承元年（一一七七年）の出来事を描く。比叡山の座主明雲に異例の沙汰が下る一方で、鹿の谷の陰謀が発覚し、首謀者は捕らえられ、それぞれ処罰されていく。

後白河院は明雲座主に配流を命じるが、山門の僧たちに阻まれる。平家の威光をおそれた多田行綱の密告で鹿の谷の陰謀が露見し、清盛は迅速に首謀者たちを捕らえる。厳しい処罰を断行しようとする清盛を、嫡男重盛は懸命にいさめる。清盛の弟教盛も主謀者藤原成親の子で娘婿であった成経の助命を乞う。後白河院は幽閉を免れたが、西光法師は斬られ、成親は配流ののち処刑、俊寛・康頼・成経は鬼界が島に流される。

04 小教訓

清盛は捕らえた藤原成親を激しく責め立てるが、嫡男重盛は清盛に成親の助命を嘆願する。成親の妻は子連れで雲林院に逃れた。

05 少将乞請

成親の子成経も清盛に捕らえられたが、清盛の弟教盛は、娘婿である成経の身柄を預かりたいと清盛に懇願する。教盛に預けられた成経はしきりに父成親の身を案ずる。

06 教訓状

清盛は後白河院を幽閉しようとし、自らも武装して出陣の準備をする。重盛は清盛邸にかけつけ、涙ながらに朝廷への恩を説き、清盛をいさめる。

01 座主流

西光法師の讒言により後白河院は比叡山の座主明雲に配流の沙汰を下す。明雲は都から追いつてられる。激怒した山門の僧たちは集結して策を練る。

02 一行阿闍梨之沙汰

山門の僧たちは十禅師権現の託宣に力を得て、配流途中の明雲を奪い返し、東塔の南谷にかくまった。唐の一行阿闍梨が配流されたように、尊い人物でも一時の不運にみまわれることがある。

03 西光被斬

多田藏人行綱はひそかに清盛の邸に出向き、鹿の谷の平家討伐の計画を密告する。清盛はただちに首謀者たちを捕らえる。西光法師は捕らえられてなお清盛に悪口雑言を吐き、無惨に処刑された。

07 烽火之沙汰

重盛の懸命の説得を受け、清盛は後白河院への報復を断念する。自邸に戻った重盛が武士を招集すると、多くの武士が駆けつけた。重盛は烽火の沙汰の故事を語り、武士たちに変わらぬ忠誠を求めた。

08 大納言流罪

成親は死罪を免れ、備前の児島に流される。以前、成親は山門と争い、処罰されるところを後白河院のとりなしで事なきを得たが、その報いが今になって現れたと嘆くのであった。

09 阿古屋之松

成経は召喚され、備中に流される。備前と備中の境にいる父成親を思い、その距離はいかほどかと問うが役人は真実を言わない。阿古屋の松の話を引き合いに、もとは一国である備前備中の距離は近いはずであるのにと成経は嘆いた。

10 大納言死去

だいなごんのしきよ

子成経が俊寛・康頼とともに鬼界が島に流されたと聞いた成親は出家する。成親の妻に手紙を託された忠臣の信俊は成親と再会を果たすが、成親は死を覚悟しており、そののち惨殺された。

11 徳大寺厳島詣

とくだいじのさつくしまもうで

役職につけず鬱屈としていた徳大寺の実定卿は、重兼に勧められ、清盛が篤く信仰する厳島神社を参拝し、願をかける。それを聞いた清盛は感激し、身内を退け、実定卿を左大将にした。

12 山門滅亡堂衆合戦

さんもんめつぽう

どうじゆかつせん

後白河院は三井寺で灌頂の儀式をしようとするが、山門の僧たちの反対にあい、天王寺で行った。山門では、学生と堂衆の対立が激しくなる。清盛は官軍を送り学生に加勢するが、堂衆の悪党たちに敗れてしまう。

16 卒都婆流

そとばながし

康頼と成経はともに吉兆の夢を見る。康頼は千本の卒都婆を作り、二首の歌を書いて海に流す。そのうちの一本が厳島に流れ着き、都に伝えられ、人々の心を動かした。

17 蘇武

そぶ

都の人々は康頼の歌を口ずさんだ。昔、漢の蘇武は胡国に捕らわれたが雁に手紙を託して漢に戻ることができたという話がある。いずれも流人の切なる思いが届いた例である。

13 山門滅亡

さんもんめつぽう

山門はすっかり荒れ果てて、山にとどまる僧もおらず、修行も行われなくなった。印度・中国・日本の仏法はすでに衰退し、この天台の仏法も滅びようとしている。

14 善光寺炎上

ぜんこうじえんしやう

そのころ善光寺も焼失した。本尊は天竺・百済伝来の霊像であった。多くの霊寺・霊山が減びるのは平氏滅亡の前兆かと人々は噂した。

15 康頼祝言

やなよりのこと

鬼界が島に流された三人のうち、康頼と成経は熊野信仰が深く、島に熊野権現を勧請するが、不信心の俊寛は何もしなかった。出家した康頼は祝詞を奏上し、帰京を祈った。

卷第三

卷第三は、治承二年（一一七八年）から治承三年（一一七八年）を描く。平清盛の娘徳子が皇子を出産するが、長男重盛が亡くなり、後白河院は鳥羽殿に幽閉される。

中宮徳子が懷妊し、安産祈願のため、鬼界が島の流人に恩赦が出され、成経少将と康頼入道は帰還する。しかし、俊寛だけは許されず島に一人残され、不運な最期を遂げた。徳子は無事皇子を出産し、清盛は天皇の外戚となる。しかし、清盛の暴政を何度もいさめてきた長男重盛が亡くなり、平家一門に不吉な兆候が現れ始める。清盛はついに後白河院を鳥羽にある城南離宮に幽閉してしまふ。

01 赦文 ゆるしふみ

中宮徳子が懷妊する。安産を祈願し、平家に恨みをもつ怨霊をなだめるため、大規模な恩赦が行われる。鬼界が島に流された成経少将と康頼入道も赦免され、ゆるし文が下されるが、その中に俊寛の名はなかった。

02 足摺 あしずり

鬼界が島の俊寛は自分の名がゆるし文に書かれていないことを知り、愕然とする。成経と康頼は召還を喜び、一人残される俊寛をなだめて船に乗る。俊寛は必死で取りすがり足摺をして叫び続けるが、船は無情にも行ってしまう。

03 御産 ごいん

中宮徳子の安産祈願には、後白河院みずからの加持祈禱もなされ、無事に皇子が誕生した（のちの安徳天皇）。清盛は皇子誕生に涙を流して喜んだ。

07 少将都帰 しょうしょうみやこがえり

成経と康頼は都に帰る途中、備前国にある成親の墓を弔い、また鳥羽の成親の山荘を訪れ、故人を偲んだ。その後、成経は帰京し、妻子と再会を果たす。康頼は東山双林寺に落ちつき、のちに「宝物集」を書いた。

08 有王 ありわう

俊寛に幼いころから仕えていた侍童の有王は、俊寛の娘の手紙を持って、鬼界が島に渡る。島を探し回った末、やせ衰えて変わり果てた俊寛にようやく出会う。そのあわれなさまは現世の罪の報いと思われた。

09 僧都死去 そうずしきょ

有王から一家のありさまを聞いた俊寛は生きる希望を失い、食を断ち臨終正念を祈ってその生涯を閉じた。俊寛の娘は悲しみ、出家する。有王も俊寛の遺骨を首にかけて諸国を巡り、仏道修行に専心した。

くぎょうやちそ

04 公卿揃 こうけいぞろ

皇子の乳母には時忠の妻が選ばれた。清盛は喜びのあまり、後白河院に過分な贈り物を捧げる。この出産にあたって不吉な兆候がいくつも見られたが、清盛邸には、多くの公卿が出産の祝いに駆けつけた。

だいとうこうりゅう

05 大塔建立 だいとうくわんりゅう

平家の皇子誕生は厳島信仰のご利益による。かつて清盛が高野の大塔を修理した時に、厳島を修理せよのご託宣を受け、そのとおりにしたところ、大明神から小長刀を授かるが、悪行があれば栄華は子孫にまで及ばないとも告げられた。

らいごう

06 頼豪 らいごう

白河院在位の時、頼豪という僧が祈禱によって皇子を誕生させた。その褒美として白河院に望みを聞かれた頼豪は三井寺の戒壇建立を要求したが許されず、飲食を絶ち餓死して四歳の皇子をとり殺した。のちに別の僧の祈禱によって、新たに皇子が生まれ、東宮に立った。

10 魑つじかぜ

京中に辻風が吹き、家が倒れ、多くの人畜が死んだ。占いは百日以内に天下の大事があり、戦乱が続くと出た。

13 灯炉之沙汰とうろのさた

重盛は東山に四十八間の御堂を建て、四十八の灯籠をかけ、毎月盛大に大念仏を催した。人は重盛を灯籠大臣と呼んだ。

11 医師問答いしもんどう

重盛は熊野に参詣し、父清盛の暴政で栄華が一代限りならば自分の命を縮めよと祈った。願いが叶い、病床に伏した重盛は、宋の名医にかかることも国の恥として拒み、ついに亡くなった。

14 金渡かねわたし

平家一門の滅亡を予見した重盛は、子孫に供養を期待することはできないと考え、金三千両を宋の育王山に寄進し、自分の後世を弔うよう取りはからった。

12 無文むもん

重盛は生前、春日明神が清盛の首を取る夢をみて平家の行く末を悟る。清盛に先立つことを予見して、嫡子維盛これもりに大臣葬に用いる無文の太刀を渡す。

15 法印問答ほういんもんどう

大きな地震が起こり、不吉とされた。福原にいた清盛は突然、大軍を率いて上京する。驚いた後白河院は静憲法印じようけんを使者に立て、事の次第を尋ねる。清盛は朝廷への恨みを多々述べるが、静憲法印は平静にふるまい、相応の返答をして退出した。

16 大臣流罪だいじんりゆうざい

清盛は数多くの公卿を解任、追放した。関白基房もとむらは出家して鎮西へ流されるはずであったが備前国にとどめられた。太政大臣師長うらふさは配所の尾張熱田宮で琵琶を奏し、神の感応を得た。

19 城南之離宮せいのんのりきゆう

高倉天皇は出家を望むが、後白河院はそれを制する。都で思うままに政権を動かした清盛は福原へ戻っていった。後白河院は鳥羽の城南の離宮で冬を過ごし、そのまま寂しく新年を迎える。

17 行隆之沙汰ゆきたかのさた

前関白基房の侍、江大夫判官遠成とろなりの一族も清盛に攻められて滅んだ。一方、困窮していた前左少弁行隆ゆきたかはにわかに清盛に取り立てられ、一時の栄華を得る。

18 法皇被流ほうおうながされ

平家の軍は院の御所を包围し、後白河院は鳥羽殿に幽閉された。静憲法印は鳥羽殿を訪ね、後白河院を慰める。高倉天皇は心痛で寢所に引きこもってしまつた。

巻第四

巻第四は、治承四年（一一八〇年）の一月から五月までを描く。三歳の安徳天皇が即位し、清盛は天皇の外戚となるが、世の中は不穏で、ついに源氏が反乱を起こしてゆく。

安徳天皇が即位し、平氏の権勢は頂点に達する。讓位した高倉院は、後白河院のために延暦寺の反対をおしきって上皇初めての参詣を厳島神社にした。

そのころ源頼政のすすめにより以仁王から平氏追討の令旨が出され、源氏の反乱がついに起きる。平氏はすぐに追討軍を出し、宇治川で合戦する。源氏は破れ、頼政は自害、以仁王も絶命。以仁王に味方した三井寺は平氏によって焼き尽くされてしまう。

01 厳島御幸

高倉天皇は三歳の安徳天皇に讓位する。新上皇となった高倉院は幽閉されている後白河院のことを清盛にとりなすため、厳島神社への参詣を決行する。

02 還御

高倉院は厳島参詣の後、所々で遊宴を催し、福原を経て帰京する。安徳天皇の即位が行われたが、大極殿が焼失していたため、紫宸殿で行われるという異例のものであった。

03 源氏揃

源三位頼政は後白河院の第二皇子以仁王に平家への謀反を持ちかける。以仁王は平家追討の令旨を出し、源行家に伝達を命ずる。熊野の別当湛増は行家に荷担する那智・新宮を攻撃するが大敗した。

07 山門牒状

三井寺の大衆たちは平家を討つ意向を固め、同じ天台宗である延暦寺に援助を乞うために牒状を送った。

08 南都牒状

延暦寺を自分たちと同格に見る三井寺の牒状に立腹した延暦寺の大衆たちは、清盛の買収もあり、三井寺の要請に応じない。三井寺は興福寺にも同様の牒状を送ると、興福寺からは同心の返牒があった。

09 永僉議

三井寺では、清盛邸を夜討ちにする計画をたてるが、平家に内通する阿闍梨真海が故意に僉議を長引かせた。

04 鼬之沙汰

鳥羽殿の御所でいたが多く騒いだので、後白河院が安倍泰親に占わせると、三日の間に吉事と凶事があるという。鳥羽から美福門院の御所へ移されることが吉事、以仁王の謀反の知らせが凶事であった。

05 信連

頼政から謀反発覚の報を受けた宮（以仁王）は三井寺へ逃れる。御所に残った信連は、宮が忘れた大切な笛を届けた後、再び御所に戻り一人奮戦する。生捕りにされた信連は、その勇猛さを惜しまれて死罪をまぬかれ、伯耆の日野に流された。

06 競

頼政が謀反を起こしたのは、長男仲綱の名馬を奪った宗盛の横暴によるという。頼政一党は自らの館に火をかけ三井寺へ向かったが、残された競は、宗盛に従うふりをして愛馬を盗み、頼政のもとに駆けつけ、仲綱の恨みをはらす。

10 大衆揃

だいにしゅざろえ

二手に分かれた三井寺の兵は出立するが、程なく夜が明け、夜討ちは中止となる。以仁王は、秘蔵の笛を三井寺に奉納し、頼政の一党を率いて、南都へ向けて出発した。

11 橋合戦

はしがっせん

以仁王が宇治の平等院で休息をとっている間に平家軍が追ってきて、宇治川をはさんでの合戦となる。源氏勢は五智院の但馬、簡井の淨妙明秀、一來法師らが橋の上に進んで勇敢に戦うが、平家方の足利又太郎忠綱は川に馬を乗り入れ、三百余騎を率い、見事に宇治川を渡りきる。

12 宮御最期

みやのむかし

平家は平等院に攻め入り、乱戦となる。源頼政は自害、その一族も次々に討死した。以仁王は南都へ落ち延びようと逃れるが、飛騨守景家に追いつかれ、光明山の鳥居前でいっせいに矢を射られ、落命した。

16 三井寺炎上

みいでらえんしやう

平家は以仁王をかくまった三井寺を焼き払い、僧たちは処罰を受けた。人々は、このように天下が乱れるのは、平家の世が末になる前兆だと噂した。

13 若宮出家

わかみやしゅつげ

宮(以仁王)をはじめ頼政一党らの首実検が行われる。宮の御子のうち、八条女院に仕える三位局腹の若宮は清盛に捕らえられるが、宗盛のとりなしで死をまぬかれ、出家した。

14 通乗之沙汰

とうじやうのさた

もう一人の宮(以仁王)の御子は出家して北国に下るが、のちに義仲に連れられて上洛することになる。以仁王に帝王の相があると予言した相少納言は誤りで、賢王の皇子でも位につかない例は多い。平家は謀反鎮圧のあと、思うままに昇進を行う。

15 鶴

つる

源頼政は優れた歌詠みで三位に昇った。また弓にも優れ、帝を悩ました怪鳥・鶴を二度も射落とし、名声を得るほどの人物であった。謀反により滅びたのは残念なことである。



巻第五

巻第五は、治承四年（一一八〇年）六月から治承五年（一一八一年）に至るまでを描く。
福原の都は半年で終わり、いよいよ源頼朝が挙兵する。

平清盛は突然、福原に都を遷す。世の人々が混乱するなか、源頼朝は文覚のすすめで平氏に反旗をひるがえす。平氏は追討軍を出すが、東国武士に恐れをなして、富士川で戦わずして敗走する。

福原遷都に対する非難が高まり、清盛はわずか半年で都を京都に戻すことになる。平氏は、近江源氏の討伐に続いて、奈良へ軍勢を向け、以仁王に荷担した南都の僧たちを討ち、奈良の寺々を焼き払うのだった。

01 都遷

平清盛は突然、福原への遷都を断行し、再び後白河院を監禁した。桓武天皇以来、すべた地として定められた京の都は荒廃していき、世の人々の動揺は甚だしい。

02 月見

秋になり、人々は各所で月見をする。徳大寺の実定卿は近衛河原の大宮の御所を訪れて、月を眺め、今様を歌い、旧都をしのんだ。

03 物怪之沙汰

福原の都では不吉な怪異現象がさまざまに起きた。清盛の眼前に巨大な顔やしゃれこうべが現れるが、清盛は動じず睨み返すと消え失せた。源雅頼の家人の夢では、政権が頼朝に移るといふ神々の暗示がなされたという。

07 文覚荒行

頼朝の謀反は文覚のすすめであった。文覚は遠藤武者盛遠といったが、出家後、熊野の那智で荒行を行い、不動明王の加護を得て効験あらたかな修験者となった。

08 勸進帳

文覚は荒れ果てた高尾の神護寺の再興のため、勸進帳を掲げて寄付を求め歩いた。ある時、後白河院の御所へ乱入した文覚は大声で勸進帳を読み上げた。

09 文覚被流

文覚は牢に入れられたが、ほどなく大赦で許される。しかし、その後も勸進する際に不吉な発言をするので、伊豆に配流となる。配流先へ向かう舟の中で暴風雨に遭うが、文覚は竜王を呼び出して叱りつけ、嵐をおさめた。

04 早馬

相模国の大庭景親から早馬で源頼朝拳兵の知らせが福原へ伝えられた。頼朝は伊豆の役人を討ったが、石橋山で大庭の軍勢に打ち負かされた。人々がさまざまに反応するなか、清盛の頼朝への怒りはすさまじかった。

05 朝敵揃

この国の朝敵を昔からみてみると、成功した例はひとつもなかった。醍醐天皇のときには、驚きながらも勅命に服すほどの皇威があったという。

06 咸陽宮

外国の例をみてみると、燕の太子丹は計略をめぐらし、秦の始皇帝の命を狙うが失敗し、滅ぼされた。頼朝も同じ目にあうだろうと言う者もいた。

10 福原院宣

ふくはらえんせん

文覚は伊豆の流人である頼朝に平氏への謀反をすすめる。文覚に父義朝の體體を見せられた頼朝が謀反を決意すると、文覚は都へ行き、後白河院から平氏追討の院宣を賜り、頼朝に持参した。

11 富士川

ふじがわ

頼朝討伐のため平維盛・忠度を中心に平氏軍が東国に出発した。忠度はなじみの女房と別れを惜しむ歌を交わす。高倉院は天下安泰を祈り、厳島神社に参詣する。二十万の大軍となつた源氏を恐れる平氏は、斎藤実盛から東国武者の勇猛ぶりを聞いてさらにおびえ、富士川に到着したもの、いっせいに飛び立つ水鳥の羽音を敵の襲来と思い込み、戦わずして逃亡した。源氏軍は勝鬨を高らかにあげた。

12 五節之沙汰

ごせつのさた

逃走した平氏を嘲笑する落書が数多く書かれた。清盛は激怒するが、維盛は処罰されず昇進し、人々は不審に思う。福原に新しい内裏が完成したが、しかるべき儀式は行われず、形だけの新嘗会と五節だけが行われた。

13 都歸

みやこがえり

福原の都を人々は嘆き、寺社からの訴えも起きたため、清盛は旧都に都歸りすることを決意した。病気がちの高倉院は急いで福原を出ていき、公卿・殿上人、平氏一門も、われ先にと京都へ帰っていった。福原遷都は南都北嶺の僧たちの政治介入を避けるためだったという。十二月、平知盛・忠度の軍が出発し、近江源氏を攻め落すと。

14 奈良炎上

ならえんしょう

高倉宮（以仁王）の謀反以来、平氏への反抗を続ける奈良の僧徒に激怒した清盛は、平重衡を大將軍として南都に攻め込む。夜いくさで放たれた火は猛火となり、寺々や大仏を焼き尽くし、おびただしい数の焼死者を出した。人々は天下が衰微する兆候だと嘆いた。

卷第六

卷第六は、治承五年（一一八一年）から寿永二年（一一八三年）までを描く。平清盛死す。力を失った平氏に、木曾義仲が勢力をのばしていく。

心労でふせつっていた高倉上皇が崩御する。人々はそのやさしい人柄を偲んだ。その翌月、平清盛は突然熱病におかされて、壮絶な死を遂げる。一方、源氏は木曾義仲が台頭し、信濃・上野を平定する。平氏は追討軍を出す。義仲に大敗する。各地で反平氏の動きが盛んになり、ますます源氏に勢力が傾いていく。

01 新院崩御

新年となったが、東国での謀反や南都炎上のため、朝廷では恒例の儀式も行われない。高倉上皇の病はいよいよ重くなり、ついに正月十四日に、二十一歳の若さで崩御する。

02 紅葉

高倉上皇は幼少の頃から、温厚な性格であった。十歳のころ、大切にしていた紅葉を下役人が燃やしてしまったがおとがめにならなかった。また、盗賊に主人の装束を奪われた少女を憐れみ、代わりの装束を与えたこともあった。

03 葵前

高倉上皇は、中宮の女房付きの女童・葵前を寵愛されたが、世間の目をはばかり、葵前を遠ざけた。葵前は病に伏し、のちに亡くなった。

07 入道死去

平氏への謀反が激しくなり、宗盛を総大将とした追討軍が東国へ向かうとしたとき、清盛が熱病に倒れる。清盛の妻・二位尼は、無間地獄から清盛を迎えが来た夢を見る。清盛は頼朝の首を墓前に供えよと言いつつ、悶死した。

08 築島

葬送の夜、西八条の清盛邸が焼け、院の御所の侍たちが乱酔するなど奇異なことが起きた。清盛は生前、人柱をせずに福原に経の島を築き、船の安全をはかる航路をつくりあげた。

09 慈心房

清澄寺の慈心房尊恵という僧は、閻魔王庁の法華経転読の席で、「清盛は慈恵僧正の生まれ変わりである」と告げられた。清盛は喜び、慈心房を律師に任じた。

04 小督

高倉天皇の嘆きが深いため、中宮は小督という女房を参らせた。小督は、清盛の嬪の恋人でもあったため、清盛は小督に怒りを向ける。小督は恐れて嵯峨に身を隠すが、仲国が探し出して宮中に連れ戻す。清盛は激怒し、小督を尼にして追放してしまう。

05 廻文

平清盛は後白河院の心を慰めようと思い立ち、自分の娘を後白河院に差し出した。そのころ、信濃の木曾義仲は反平氏の挙兵を企てる。廻文を出す。信濃・上野の源氏がみな従った。

06 飛脚到来

平氏は、城太郎助長を越後守に任じて、木曾義仲追討にあたらせる。諸国から次々に飛脚が到来し、河内や九州・四国の武士が平氏に背いたという報が入る。

10

祇園女御

また清盛は白河院の子であるとも言われた。かつて父忠盛あたるは、白河院から褒賞として懷妊中の祇園女御を賜った。その祇園女御から生まれたのが清盛であるという。清盛と親交の深い五条大納言も相次いで亡くなる。やがて源平両軍は木曾川で戦い、平氏が勝利をあげるが、続いて攻めきれない。東国はみな源氏になびくありさだった。

しわがれごえ

11

嗚声

城太郎助長が木曾義仲追討のため出立するとき「平氏に味方するものを捕らえよ」というしわがれ声が響きわたる。無理やり出立した助長は落馬して死んでしまった。七月、養和に改元され、大赦により流されていた公卿たちが帰京する。

12

横田河原合戦

謀反鎮圧の祈禱を平氏は各所で行うが、神仏が聞き入れないためか変事が起こる。寿永に改元。兄助長に代わって越後守についた城助茂は、横田河原で木曾義仲に大敗する。しかし都の平家はそしらぬ体で華やかな行事に日を送る。南都北嶺、熊野、吉野、伊勢神宮にいたるまで、世は源氏に通じ、平氏に従うものはなかった。

巻第七

巻第七は、寿永二年（一一八三年）四月から七月を描く。勢いにのる木曾義仲軍をおそれた平家一門はついに西国へと落ちてゆく。

平家は源氏軍を追討しようとするが木曾義仲に惨敗する。比叡山の僧侶たちにも見限られた平家の衰勢は明らかとなり、平家一門は都を離れ、西国へ下る決意をする。氣配を察した後白河院は平家から逃れ、身を隠す。住み慣れた邸宅に火をかけ、それぞれの思いを胸に平家一門は次々と都を落ちてゆく。福原にたどり着いた平家一門は旧内裏跡も焼き払い、西国へと船を出すのだった。

01 清水冠者

源頼朝と木曾義仲の間に不和が生じ、頼朝は義仲を攻めようとするが、義仲は十一歳になる嫡子清水冠者義重を人質に差し出し、事なきを得た。

02 北国下向

木曾義仲が東山・北陸兩道を従えて京へ攻めくるとの報に、平家は諸国の兵を召集するが応じたのは西国勢のみであった。平家は義仲追討軍として十万余騎で北陸道へ出立したが、道すがら物資を徴発したため、人民はみな逃げてしまった。

03 竹生島詣

副將軍平經正は、竹生島に参詣し、琵琶の秘曲を奉納すると、明神が白竜と化して經正の袖に現じるといふ瑞兆が出た。

07 篠原合戦

木曾義仲は諸社へ神領を寄進した。斎藤別当実盛をはじめとする東国武士は平家に殉ずる。加賀の篠原合戦では今井四郎・樋口次郎が活躍し、平家軍は敗走。高橋長綱は入善の小太郎に情けをかけ、逆に討たれてしまう。

08 実盛

斎藤実盛は最後まで名乗らずに手塚太郎に討たれる。七十過ぎの実盛は、討死を覚悟し、白髪を黒く染め、錦の直垂を着て出陣していた。

09 玄昉

戦乱が鎮まれば伊勢行幸するとの仰せがある。伊勢行幸は天平年間、藤原広嗣追討の際が最初である。広嗣の亡霊は調伏を試みた玄昉の首を取り、三年後に頭骨を興福寺の庭へ落としたという。

04 火打合戦

平家は山と川に囲まれた火打が城の木曾義仲軍を攻めあぐねていたが、平泉寺の長吏斎明の内通によって勝利する。のち平家軍と義仲軍は加賀・越中の国境、砺波山の辺りで対峙する。

05 願書

奇襲作戦を立てた木曾義仲は、羽丹生の八幡宮に戦勝祈願の願書を大夫房覚明に書かせて奉納すると、山鳩が来て吉兆を表した。

06 倶利伽羅落

木曾義仲は作戦通り、日中は平家軍を適当にあしらい、暗くなると敵の背後に回り、一気に攻撃をかけ、平家の大軍を倶利伽羅が谷に追い落とした。さらに義仲は志保でも勝利し、能登へと進撃した。

10 水曾山門牒状

水曾義仲は、上洛に先立って大夫房覚明の言に従い、山門へ牒状を送り、比叡山の僧たちが源平どちらに味方をするのかを問うた。

11 返牒

山門ではさまざまな論議の末、宿運の尽きた平家を見限り、源氏に同心する旨の返牒を送った。

12 平家山門連署

これを知らない平家は、一門の連署による願書を山門に送り、平家に同心を求めた。比叡山座主が願書を祈禱すると平家没落を予告する託宣の和歌が現れ、山門は源氏同心の決意をひるがえさなかった。

16 忠度都落

薩摩守忠度は途中で引き返し、歌道の師・藤原俊成を訪ね、自分の歌を託し、勅撰集への入集を希望する。俊成はのちに「千載集」に忠度の歌を読人知らずとして収めた。

17 经正都落

平经正は幼い頃仕えていた仁和寺の御室を訪れ、宮から拝領していた琵琶の名器「青山」を返上した。

18 青山之沙汰

「青山」は、昔、唐の琵琶の博士・廉承武から相伝したもので、我が国の宝である。廉承武は死後、成仏するために村上天皇の前に現れ、秘曲を伝授したという。

13 主上都落

肥後守貞能は九州の謀反を平定して帰京するが、やがて源氏が都に迫るとの報が入り、平家は西国落ちを決意する。後白河院はひそかに鞍馬に逃れ、平家は三種の神器と六歳の安德天皇を奉じて都を立つ。

14 维盛都落

平维盛はとりすぎる妻を残し、息子の六代を斎藤実盛の遺児に託して出立する。平家は六波羅・西八条などに火を放って、都を落ちていった。

15 聖主臨幸

都は焼け落ち、平家の栄華は崩壊した。畠山重能ら東国武士は平宗盛に赦され、東国へ返された。

19 一門都落

平頼盛はかつて母・池禪尼が情をかけた源頼朝を頼って引き返す。平家一門は七千余騎で西国をめざす。肥後守貞能は都に残り、亡主・重盛の遺骨を高野へ送ったのち、東国へ下ってゆく。

20 福原都落

福原へ着いた平家一門は、平宗盛を中心に運命を共にする覚悟を決める。福原で一夜を明かしたのち、内裏等に火を放って、平家一門は船に乗り、西国へ落ちていった。

巻第八

巻第八は、寿永二年（一一八三年）七月末から寿永三年（一一八四年）にいたるまでを描く。平家は西国に、都には木曾義仲、東国に源頼朝が勢力をふる。

後白河院は木曾義仲に守護されて都に入り、義仲に平家追討の院宣を下し、孫の四宮（のちの後鳥羽天皇）の即位を決める。平家は九州を追われるが四国の八島に身を寄せ、勢力を保つ。一方、東国の源頼朝は鎌倉で征夷將軍の院宣を賜る。木曾義仲は、無法なふるまいで後白河院の不興をかい、水島・室山で平家に敗れるが、法住寺合戦で後白河院を拘束し、都の政権を掌握する。

04 太宰府落

ださいふおち

維義は旧主である平家の説得に耳を貸さず、平家を追いたる。平家は太宰府を落ち流浪の身となり、平清経は前途をはかなんで入水する。平家一門は四国の八島に渡り、船を御所とした。

05 征夷將軍院宣

せいゐしやうぐんゐんせん

鎌倉の源頼朝に征夷將軍の院宣が下る。使者中原泰定から、鶴岡八幡宮で院宣を受け取った頼朝の威勢はかなりのものであった。

06 猫間

ねいす

鎌倉の源頼朝が立派であるのに対して、都の木曾義仲は不法で田舎者であった。猫間中納言の訪問にひどいもてなしをし、牛車の乗り方も知らず、傍若無人のふるまいをする。

01 山門御幸

さんもんごこう

後白河院は、木曾義仲に守られて帰京し、義仲・行家に平家追討を命じる。また、故高倉院の三宮・四宮と対面し、四宮に即位させることを決めた。

02 名虎

なこら

木曾義仲は左馬頭となり朝日の將軍と呼ばれ、平家一門はみな免官となる。四宮のちの後鳥羽天皇が即位する。皇位決定は人知に及ばぬもので、かつて皇位争いを名虎と能雄の相撲で決することがあった。

03 緒環

おだすき

九州では安徳天皇が宇佐八幡に参詣したが平宗盛の夢見は悪く、平家一門は太宰府に戻る。平家追討の命が下り、緒方三郎維義がこれを受ける。維義は高知尾明神の神体である大蛇が生ませた子の子孫であった。

07 水島合戦

みずしまがっせん

平家は八島で山陽・南海道の十四ヶ国を従えて、再び勢力を盛り返した。木曾義仲は討手を遣わしたが、備中国・水島で平家軍に大敗する。

08 瀬尾最期

せのおさい

木曾義仲は山陽道におもむく。捕虜となっていた平家方の瀬尾太郎兼康は備前国に着くと寝返り、倉光成澄を討つ。今井四郎に城郭を攻め落とされた兼康は、息子と生死をともにしようと引き返し、奮戦のち討死する。

09 室山

むろやす

木曾義仲が八島へ攻めようとするところに、都から行家が義仲の讒言をしているとの知らせが入り、義仲は都へ引き返し、行家は入れ違いに西へ下る。室山に陣を張った平家軍は行家軍を打ち負かす。

10 鼓判官

木曾義仲の軍勢が都で乱暴を働くので、後白河院は鼓判官とちやす知康を使いに出すが、知康は追い返され、後白河院は義仲追討を決意する。義仲は法住寺に攻め込み、院方を破り、院と天皇を手中におさめる。

ほうじゆうじかつせん

11 法住寺合戦

院方の近江守仲兼なかかねたちは奮戦のち落ちてゆく。明雲大僧めいうん正も討たれ、後白河院はその死を悲しんだ。義仲は、都で思うままに権勢をふるう。平家は西国、源頼朝は東国、木曾義仲は都に、それぞれ勢力をはっていた。



巻第九

巻第九は、寿永三年（一一八四年）の出来事を描く。源頼朝の東国軍に攻められた木曾義仲はあえなく最期を遂げ、東国軍はそのまま平家を追討してゆく。

源頼朝の命で源範頼・義経を大将とする東国軍は、木曾義仲の軍勢を攻める。追い込まれた義仲は自害を図ろうとするが、馬を深田に乗り入れてしまい討ち取られる。義仲を破った後、平家追討にむかった東国軍は一の谷で平家と激戦を繰り広げる。一の谷の背後、鶴越から義経が奇襲をかけると形勢は一気に源氏に傾き、平家軍は大敗走となる。名だたる平家の武将はおのおの最期を遂げる。

04 木曾最期

きそこのさいし

木曾義仲は天津の打出浜で今井四郎と行き会い、軍勢を集めて最後の戦いに挑む。落ち残った女武者・巴を強いて立ち去らせ、最後は今井と主従二騎となる。義仲は今井にすめられ自害しようとするが、馬を深田に乗り入れたところを討たれてしまふ。それを見た今井は壮絶な自害を遂げた。

05 樋口被討罰

ひぐちのきられ

ひぐちのきられ

今井の兄樋口兼光は、助命を約束した児玉党に降伏するが、公家たちの恨みは深く、処刑される。一方、平家は八島を出て福原まで攻め上り、一の谷に城郭を築き、陣を敷いていた。

06 六ヶ度軍

むくかたびる

平家が福原に渡ると、四国・九州・淡路などで反乱が起こるが、能登守・平教経が次々と戦功をあげ、謀反を押さえた。

01 生ずきの沙汰

いけずきのさた

平家追討の軍を発しようとしていた木曾義仲は、源頼朝が弟の範頼と義経を大將軍として上洛させるとの報に驚き、宇治・勢田に軍勢を遣わす。梶原景季は頼朝に名馬いけずきを所望するが、頼朝は梶原にするすみという馬を与え、いけずきは佐々木高綱が拝領した。

02 宇治川先陣

うじがわのせんじん

宇治川を挟んで、義経軍と義仲軍が対戦する。佐々木高綱と梶原景季は名馬を駆使して先陣を争い、佐々木が先陣を果たす。畠山重忠も続いて宇治川を渡り、奮戦する。

03 河原合戦

かわらがっせん

木曾義仲は敗れ、義経は後白河院を守護する。義仲は乳母子の今井四郎兼平の行方を気にかけて、河原で防戦し、命からがら落ちてゆく。

07 三草勢揃

みくさせいぞろ

範頼・義経の軍は平家追討のため西国へ出発した。平家は福原で清盛の追善供養、叙位除目を行う。源氏は一の谷で源平の合戦をすべく、範頼軍は昆陽野に、義経軍は三草山に進出する。

08 三草合戦

みくさがっせん

平家側は資盛・師盛等が三草山に陣取っていたが、義経の夜討ちに不意をつかれ、大敗する。

09 老馬

らうば

平家は、教経に一万余騎をつけて、防戦する。義経は、老馬や土地の者に案内をさせながら、一部の兵を率いて鶴越をめざす。

10 一二之懸 いちにのかけ

搦手軍の熊谷直実・小次郎父子と平山季重が、一の谷の先陣を争う。熊谷が先にたどりついて名告りをあげるが、木戸口がひらくと平山は一番に敵陣に駆け入り、おのおの奮戦する。

11 二度之懸 にどのかけ

大手の範頼軍では、河原太郎・次郎兄弟が先陣を飾るも討死し、続いて梶原一族が攻め入る。梶原景時は、息子景季を見失うが、再び敵陣に駆け入り、父子ともに生還する。

12 坂落 さかおとし

義経は、一の谷後方の鶴越に到着する。急坂を駆け降り、背後から平家軍に奇襲をかけると、平家は総崩れとなった。

16 敦盛最期 あつものさいご

平敦盛は、逃げ落ちるところを熊谷直実に呼び返され、組み伏せられる。わが子と同じ年頃であることを知った熊谷は心ならずも首を取るが、後に敦盛であることを知り、世をはかなみ、出家をする。

17 知章最期 ともあきらのさいご

他にも平家の武将は数多く討たれた。平知盛は落ちゆくときに息子知章が討たれ、その間にひとりで沖の船に逃れた。子を見捨てて逃げのびた悲しみを涙ながらに兄宗盛に語った。

18 落足 おちあし

平師盛も通盛もそれぞれ討たれた。敗れた平家は安徳天皇を擁して船に乗り、海上をただよう。

13 越中前司最期 えちゅうのせんじさいご

平家の越中前司盛俊は猪俣小平六と戦い、猪俣を組み伏せるが、降人になるふりをした猪俣にだまされて討たれてしまう。

14 忠度最期 ただのりさいご

平家の薩摩守忠度は、岡部六野太と組み討ちとなるが、岡部の童に右腕を切られて、討たれる。童に歌一首が結び付けられていることから忠度と知れ、文武に優れた彼の死が悼まれた。

15 重衡生捕 しげひらいけどり

平重衡は落ちてゆくところを、梶原景季に馬を射られ、同道していた乳母子・後藤兵衛盛長に見捨てられ、生捕にされる。逃げのびた盛長はのちまで非難を浴びた。

19 小宰相身投 こざうしょうみなげ

夫通盛の死の知らせを受けた北の方・小宰相は悲しみに暮れ、やがて乳母が寝入ったすきに身もった身体のまま、船から身を投げた。この小宰相は、もとは上西門院の女房で宮中一の美人だったが、女院のとりなしがあつて通盛の北の方になった。

卷第十

卷第十は、寿永三年（一一八四年）の二月から年の暮れまでを描く。一の谷の敗戦で平家は数多く討たれた。平重衡は生捕りになり、平維盛は出家したのち入水する。

生捕りにされた平重衡は関東に下向する。

頼朝と対峙した重衡の態度に周囲は感服する。また、内裏女房や千手前など、重衡を心から慕う女たちもいた。

平維盛は八島を抜け出し熊野へ行き、出家する。妻子への思いを断ち、那智の海に入水して果てる。都では三種の神器がなままた新天皇（後鳥羽天皇）が即位する。

01 首渡 くびわたし

一の谷で討ち取られた平氏の首が都に到着する。源範頼・義経の主張でそれらの首は京中に晒された。

02 内裏女房 だいりにようばう

生捕りにされた平重衡は京中を引き回される。三種の神器と引き換えに重衡を釈放するとの院宣が出される。重衡はかつてなじみのあった女房に直面する。この女房は、のちに重衡が処刑されると出家し、重衡の菩提を弔った。

03 八島院宣 やしまいんせん

院宣が八島にいる平家に伝えられる。三種の神器を都に返せば重衡を赦すという内容であった。

07 千手前 せんじゆのすゑ

頼朝に見参した重衡の態度は堂々としたものであった。身柄を預かった狩野介宗茂は重衡を丁寧に扱う。頼朝は千手前を重衡のところへ遣わし、千手前は朗詠や歌の相手をして重衡を慰める。重衡の死後、千手前は出家して重衡の後世を弔った。

08 横笛 よこふえ

八島を脱出した平維盛は妻子に会いたい心を抑えて、高野山の滝口入道のもとへ行く。滝口入道はもとは武士であったが、身分の低い横笛との恋を父にいさめられて出家し、仏道修行をしてきた人物であった。

09 高野巻 こうやのまき

維盛は滝口入道を先達として高野山を巡り、奥の院に参拝した。醍醐天皇の時、勅使の前に入定した弘法大師が姿を現し、弥勒仏の下生を待っていると告げたという。

04 請文 うけぶみ

二位尼は重衡を助けたいと主張するが、平家一族は反対し、院宣を拒否する内容の請文を送った。

05 戒文 かいもん

重衡は出家を望むが許されず、やっと法然上人との対面を許される。重衡の懺悔を聞いた法然は極楽往生に至る道を説き、重衡に戒を授けた。重衡は布施として硯を渡した。

06 海道下 かいどうくだり

頼朝の要求により重衡は鎌倉に護送されることになる。道中、歌枕や名所旧跡を過ぎ、池田の宿で侍従と歌の贈答をした後、重衡は鎌倉へ入る。

10 維盛出家

維盛は従者の与三兵衛重景・右重丸とともに出家し、舎人の武里には自分の最期を八島の平家一門に伝えよと言いつける。熊野へ向かう途中、維盛とすれ違った湯浅宗光は維盛と知りつつ一礼して通り過ぎる。

くすのさんけい

11 熊野参詣

維盛は熊野を参詣しながらも妻子への思いが捨てきれない。那智では、維盛を見知っている僧がいて、かつての平家の栄華をしのび、涙を流す。

これからのしゅけ

12 維盛入水

維盛は入水するために船に乗り、那智の沖へ漕ぎ出したが、妻子への思いを断ち切れない。滝口入道は往生を説き、維盛はついに入水する。二人の従者も後に続いた。

13 三日平氏

舎人武里が八島に帰り、維盛の遺言を伝えると平家の人々は涙を流した。平頼盛は関東へ下向し、源頼朝の歓待を受けるが、頼盛の家臣弥平兵衛宗清は平家をおもんばかり同行しなかった。伊賀・伊勢平氏が蜂起するがすぐに鎮圧される。維盛の北の方は夫の死を聞き、出家した。

ふじと

14 藤戸

都では後鳥羽天皇が三種の神器なしで即位する。源範頼軍と平家軍は備前国藤戸で海をはさんで対戦する。船のない源氏は攻撃できずにいたが、佐々木三郎盛綱がひそかに地元の男から浅瀬を聞き出し、渡海して平家軍を攻める。

だいじょうそのさた

15 大嘗会之沙汰

義経は検非違使五位尉となり九郎大夫判官と呼ばれる。大嘗会が催されたが、人々は源平の戦で疲弊していた。範頼は続いて平家を攻めることをせず、そのまま年が暮れた。

卷第十一

卷第十一は源平合戦のクラ
イマックス、元暦二年（一一八
五年）の八島・壇の浦の戦いが
描かれ、ついに平家は滅亡し
ていく。

01 逆櫓

さから

平家追討の院宣を受けた源義経は八島へ向かう。出港に
あたり、梶原景時と逆櫓を取り付けるか否かで口論になる。
逆櫓を不要とする義経は嵐の中、少数で阿波国への渡海を
敢行した。

かつうら つけたりおおざかてえ

02 勝浦付大坂越

勝浦に上陸した義経は在地武士・近藤六親家の案内で桜間
介能遠の城を攻め、さらに八島を攻めるため大坂越の山を越
える。源氏が内裏に火をつけ攻め込むと、平家はあわてて海
上に逃れた。

つぎのよちん

03 嗣信最期

源氏が少数だと知った平家は反撃に出る。佐藤嗣信は義経
の身代わりとなって能登守教経に射殺されてしまう。

源義経は改めて平家追討を誓い、西国へ
向かう。八島の戦いでは、那須与一の扇的
や、義経の弓流しなどが描かれる。次第に海
上へと逃れていく平家は壇の浦でついに敗
戦が確定し、二位尼は安徳天皇を抱いて入
水、平家一門もことごとく海に身を投じた。
宗盛父子は生捕りとなり、のちに斬られる。
一の谷で捕らわれた重衡も斬首された。武
勲を挙げた義経だが、頼朝の不興を買い、腰
越でとりなしの書状をしたためる。

06 志度合戦

しどかつせん

平家は志度の浦に退却し、海上をさまよう。田内左衛門教能
は、伊勢三郎義盛にだまされて源氏に降伏する。その頃、梶原
一行がやっと八島に到着し、嘲笑される。

04 那須与一

なすのよいち

平家は小舟に美女を乗せ、扇的を立てて源氏を挑発す
る。義経の命を受けた那須与一は見事に扇的の射る。

05 弓流

ゆみながし

的を射たことに感極まって舞い始めた平家の男をも那須
与一が射倒す。両軍の戦闘は再開され、平家方・悪七兵衛景清
が源氏方・みをの屋の十郎の鍛をひきちぎる。混乱の中、義経
は弓を落とすが、強弓でないことを嘲笑されるのを恥じて、
必死に拾い上げて戻る。

07 鶏合 壇浦合戦

とりあわせだんのうらかつせん

熊野別当湛増は闘鶏占いの結果、源氏につき、伊予の河野
四郎通信も源氏につく。決戦に際し、義経と梶原は先陣を争
い対立する。門司・赤間の関で源平の決戦が始まる。平知盛は
阿波民部重能の心変わりを疑うがなすすべがない。潮の流れ
が味方し、平家が優勢となる。

08 遠矢 とねや

和田小太郎義盛 新居紀四郎親清・阿佐里与一らが遠矢を競い合う。源氏方に白旗が舞い降りる吉兆が現れ、平家方には平家が滅びるという海豚の奇瑞が出る。阿波民部重能が源氏に寝返り、平家方は追い込まれていく。

09 先帝身投 せんていみなげ

さらに源氏は平家方の水手舵手を射殺したため、平家の舟は動きを止められる。平知盛は敗戦を帝の舟に告げる。二位尼は幼い安徳天皇を抱き、神璽（＝勾玉）と宝剣を携えて、海に沈んでゆく。

10 能登殿最期 ののどのさいご

建礼門院も入水するが、源氏に引き上げられる。平家は教盛・経盛兄弟・資盛らが海に身を投げた。宗盛・清宗父子は死にきれずに泳いでいるところを捕らえられる。能登守教経は義経を追いつめるがかわされ、源氏の兵二人を道連れに入水する。

14 鏡 かがみ

源頼朝は従二位となる。都では内侍所（＝鏡）が内裏に戻り、神楽が催される。鏡は天照大神が鑄造なされ、今に伝わる。かつて内裏が火災になったときに小野宮実頼がその鏡を守ったという。

15 文之沙汰 ふみのさた

平時忠は娘を義経の妻にして、平家方に不利な手紙を義経の手から取り返し、処分する。平家を鎮圧した義経の都での評判は高く、それを聞いた頼朝は不快を表す。

16 副将被斬 ふくしやうきられ

平宗盛は義経に頼み、幼い次男 副将と対面する。翌日、宗盛は鎌倉に送られ、副将は六条河原で斬殺される。副将の女房二人は副将の首と遺骸を抱いて桂川に入水した。

11 内侍所都入 うちんしよのみやうり

平知盛も入水し、合戦は終わる。平家敗北が後白河院に報告され、義経は平家の捕虜を連れて都へ向かう。三種の神器のうちの神璽・内侍所が都に返還された。

12 剣 けん

神代から伝わる霊剣のひとつである草薙の剣は、壇の浦の海中に沈んでしまった。素戔鳴尊が大蛇の腹から取り出した草薙の剣であるから、大蛇が安徳天皇の姿になって剣を取り返しにきたのだといわれる。

13 一門大路渡 いちもんおちわたり

平宗盛父子、時忠ら平家の捕虜が入京し、大路を渡される。見物の人々は涙を流し、後白河院も哀れに思う。宗盛父子は義経に預けられる。

17 腰越 こしごえ

源義経は宗盛父子を連れて鎌倉に向かうが、梶原の讒言をきいた頼朝は、宗盛父子の身柄を受け取ると、義経を鎌倉に入れずに腰越へ止めた。義経は腰越の地で、大江広元に心中を吐露し、とりなしを頼む書状をしたためる。

18 大臣殿被斬 おおむねのきられ

源頼朝と対面した宗盛の卑屈な態度は人々の憐れみをかう。義経は頼朝と対面できぬまま宗盛父子を伴って再び都に向かう。近江の篠原宿で宗盛父子は斬られ、首は都に晒された。

19 重衡被斬 しげひらのきられ

平重衡は南都の僧たちの要求で奈良に送られる途中、壇の浦で捕らえられ日野に戻った妻・大納言佐と対面し、最期の別れを惜しむ。南都に引き渡された重衡は念仏を唱えた後、斬られる。妻は遺骸を引き取り、後世菩提を弔った。

巻第十二

巻第十二は壇の浦で平家が敗れた後の元暦二年（一一八五年）七月からを描く。平家の残党狩りが行われ、文覚の力を借りて助命されていた平家直系の六代御前もついには斬られ、平家の子孫は絶え果てた。

壇の浦合戦で勝利をおさめた源義経は兄頼朝と不和になり、都落ちをする。頼朝は全国を統治し、平家の残党狩りを行う。直系である平維盛の嫡子六代も捕らわれるが、文覚に救われ、のちに出家する。後白河院や頼朝の死後、文覚は朝廷に謀反を企てて隠岐に流される。その際に六代も斬られ、ついに平家の子孫は絶えることになった。

01

大地震

平家が滅び、世も鎮まるかに見えたが、大地震が起きて大惨事となった。人々は安徳天皇や平家一門の怨霊の祟りではないかと恐れた。

02

紺搔之沙汰

文覚が頼朝の父義朝の髑髏を保持していた紺搔の男を伴い、髑髏を鎌倉に届ける。頼朝は亡父の首を厚く供養し、朝廷は義朝の墓に贈官贈位する。

03

平大納言被流

捕らわれた平家の配流地がそれぞれ決まる。平時忠は、建礼門院と別れを惜しんだ後、配流先の能登へと向かう。

06

吉田大納言沙汰

頼朝は吉田大納言経房を通じ、惣追捕使となり、諸国に守護地頭をおいた。経房は厳正誠実で立派な、希有の人物であった。

07

六代

平家の子孫狩りが行われ、維盛の長男六代も捕らえられる。乳母の懇請を受けた文覚は北条時政に猶予を乞い、頼朝の赦免状を持ち帰り、間一髪で六代の命を助ける。

08

泊瀬六代

六代は文覚に引き取られ、母と再会する。北条時政は行家・義憲追討を甥の時貞に命じる。行家は捕らわれ処刑され、義憲は自害した。手柄を立てた常陸房正明は流罪にされ、後、恩賞を賜った。

04

土佐房被斬

梶原景時の讒言から義経の謀反を疑う頼朝は土佐房正俊に義経暗殺を命ずる。察知した義経は土佐房を捕らえ、斬首する。

05

判官都落

土佐房が討たれたことを知った頼朝は、範頼に義経追討を命じるが、範頼は速やかに応じなかったため殺された。都落ちを決意した義経は船で九州をめざすが暴風に阻まれてかなわず、奥州へ下る。頼朝の代官として北条時政が入京し、義経追討の院宣を賜る。

六代は出家し、高野・熊野に亡父の跡を訪ねる。八島から落ちのびた平重盛の子忠房は抵抗していたが、頼朝に謀られて投降し斬られる。藤原経宗の養子となっていた重盛の子宗実も頼朝に召喚された後、断食して命を絶つ。知盛の子知忠、越中次郎兵衛盛嗣など、平家残党狩りは続いた。頼朝が死去すると、文覚は朝廷に謀反を企てるが失敗し、隠岐へ流された。そして高雄で修行していた六代が斬られ、ついに平家一族は滅亡した。



灌頂卷

壇の浦合戦で生き残った建礼門院は出家して大原の寂光院で平家一門の菩提を弔う。文治二年（一一八六年）、後白河院はひそかに建礼門院を訪ねてゆく。

壇の浦で捕らえられた建礼門院は帰京し、出家する。大原の寂光院へと移り住んだ建礼門院は粗末な庵で仏道に専心し、平家一門の菩提を弔う。そこへ後白河院が訪ねてくると、建礼門院は自らの一生を六道輪廻にたとえて語るのだった。

のちに建礼門院は、この地で極楽往生を遂げた。

ちくどうのさた

04 六道之沙汰

建礼門院は後白河院と対面し、安徳天皇と平家一門の後生安楽を祈っている日々であることを告げる。そして、栄華から滅亡に至るまでの自分の生涯を、六道にたとえて切々と語るのであった。

によういんしきよ

05 女院死去

日暮れとなり、後白河院は還御された。建礼門院は亡き人々の冥福を祈り続ける。平家一門の悲劇は、平清盛が思いのままに権力をふるった報いとされる。年月が過ぎ、建礼門院は寂光院で静かに往生を遂げた。

によういんしきよ

01 女院出家

壇の浦で入水したが源氏に引き上げられた建礼門院は帰京し、出家した。平清盛の娘であり、安徳天皇の生母として仰がれたかつての暮らしりとかけ離れた侘び住まいの中で、建礼門院は先帝や平家一門の面影をしのび、嘆き悲しんだ。

おおはらいり

02 大原入

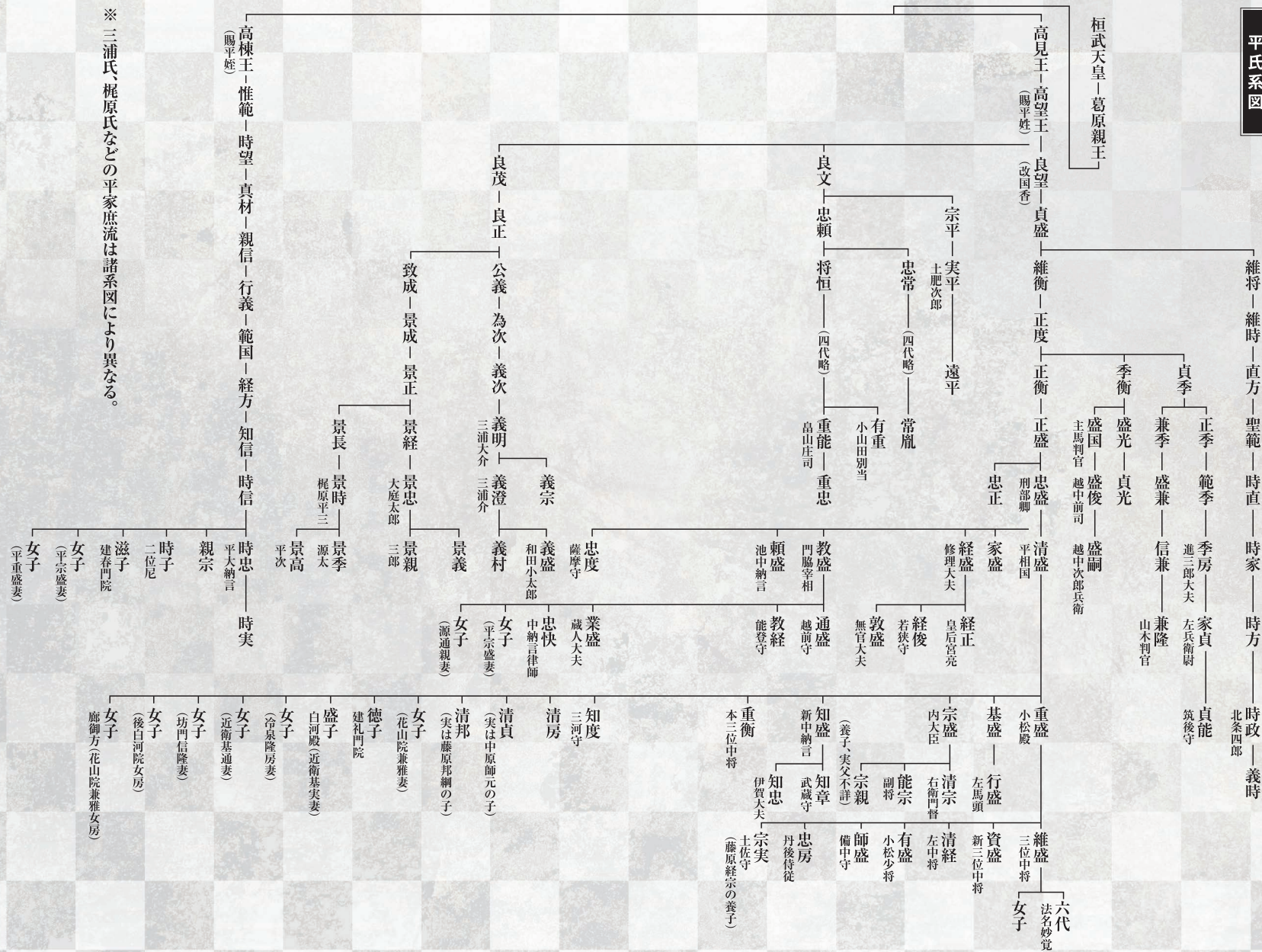
建礼門院はさらに人目を憚り、大原の寂光院へ移った。お堂の傍らに庵室を結び、一間を御寢所に、一間を仏間に定め、朝夕の念仏を怠りなく月日を送る。庭を通る足音は人ではなく鹿であり、寂しさがいつそうまる暮らしであった。

おおはらいり

03 大原御幸

後白河院はわずかの供を従えて、大原の寂光院へ御幸された。出迎えた老尼は後白河院の乳母の娘・阿波内侍であった。後白河院は庵室を見回し、建礼門院の暮らしびりを哀れに思う。やがて山から下りて来た建礼門院は後白河院の訪問に驚き、呆然と立ちすくむ。

平氏系図

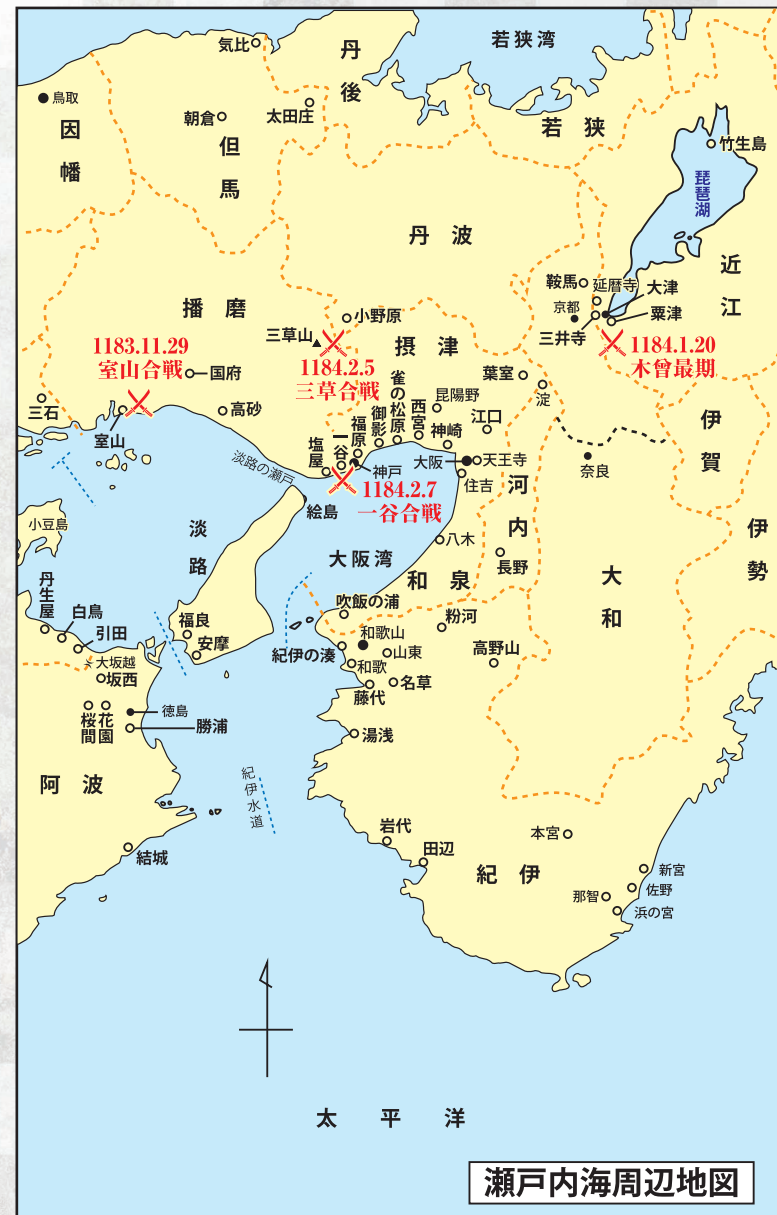


62



63





朗読 岡崎 弥保 (おかざき・みほ)

俳優・語り手。東京女子大学卒業。同大学院修了（日本古典文学専攻）。言葉の力に魅せられ、編集者を経て、俳優・語り手に。

勝（NPO 日本朗読文化協会主催）。俳句「藍生」（黒田杏子主宰）会員。「源氏物語」全五十四帖（与謝野晶子訳）の朗読CDをはじめ、「おくのほそ道」にほんむかしばなし」「小泉八雲怪談集」「ひろしまのピカ」「夏の花」等、収録多数。

●公式サイト「言の葉」 <http://ohimikazako.wix.com/kotonoha>

監修 大津雄一
(おおつ・ゆういち)

早稲田大学教育・総合科学学術院教授。博士(文学)。専門は日本中世文学(軍記物語)。著書に『軍記と王権のイデオロギー』(翰林書房、二〇〇五年)、『平家物語』の再誕 創られた国民叙事詩(ＮＨＫ出版、二〇一三年)、『挑発する軍記』(勉誠出版、二〇二〇年)、共編著に『平家物語大事典』(東京書籍、二〇一〇年)、『平家物語 覚一本全』(武蔵野書院、二〇一四年)などがある。

